

美術科

松田 真里和

共同研究者 鷺山 靖（金沢大学）

1. はじめに

近年、新しい知識や情報、技術は様々な領域を支える基盤となっている。AI を含む人工知能等の先端技術や社会構造は、絶え間ない革新により大きく、急速に変化しており、今の子供たちやこれから誕生する子どもたちが成人し、社会を担うようになる頃には、厳しい挑戦の時代を迎えると予想される。平成 31 年 4 月 17 日の中央教育審議会、文部科学省（以下文科省）の資料「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）」においても以下のように述べている。

このような急激な社会変化が進む中で、子どもたちが変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することが求められており、それに対応し、学校教育も変化していかなければなりません（文科省, 2019, p. 1）。

この社会情勢等を踏まえ、昨年度本校では Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力を右の 10 観点にまとめた。本校美術科教諭前任、西澤 明は昨年度の研究¹で、美術科において、これらの観点は美術科が目指す資質・能力と大きな関わりがあると示している（西澤明, 2022 年度, p. 103）。

今年度の学校研究では総合においての探究的な学習活動が、これからの社会を生き抜く力に大きく繋がると仮説を立て、新設教科「創造デザイン科」と各教科との効果的な関わりを考察している。

布村育子は「生きる力」を「変化に激しい社会において、自ら課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決

していく資質や能力」であるとまとめ²、さらに「理性的な判断や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動する心といった柔らかな感性を含むものである」と説明している（布村, 2008, p. 107-109）。栗田絵莉子によれば、ここでは「探究（探求）」は用いられてはいないが、2005 年頃から「自ら学び自ら考える力の育成（探求型の教育）」として「探求」が能動的な活動を指し、生きる力の資質・能力として用いられるようになったことを示している（栗田, 2015, p. 4-5）。布村はゆとり教育の中で「生きる力」を「心の教育」として第一に考えることを意図していたが、栗田と布村は「学力低下問題」といったゆとり教育批判を受けて、「生きる力」が「心の教育」から「確かな学力」へと変化したことを述べている。このような背景を踏まえ、中央教育審議会でも、ある物事をあくまで捜して得ようと努める、或いはさがし求める「探求(search for)」の教育から、ある物事の真の姿、あり方、

- ・デザイン思考
- ・イノベーターのマインドセット
- ・より良く生きようとする態度
- ・多様性の尊重
- ・自然体験や本物に触れる実体験を通して醸成される感性
- ・持続可能な社会を志向する倫理観・価値観
- ・文章を読み解く力
- ・対話する力
- ・論理的思考
- ・批判的思考

¹ 西澤明・鷺山靖『美術科』2022 年度、金沢大学附属中学校研究紀要

² 布村育子『「生きる力」の変容と教員養成の課題』2008, 埼玉学園大学紀要 第 8 号

意義、本質をさぐって見きわめる「探究(research)」の教育へと言葉が変化している(栗田, 2015, p. 5)。

(1) 美術科における「探求」と「探究」の考察

美術科には多種多様な表現媒体があり、中学校美術において学習指導要領には4つの表現活動と鑑賞活動が提示されている。感じ取ったことや考えたことなどを基に絵や彫刻などに表現する「描く」活動と「つくる」活動、伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する「描く」活動と「つくる」活動、そして制作した作品だけでなく、既存の作品などを「鑑賞する」活動である³。作品制作における表現媒体は従来の「描く」「つくる」とどまらず、新しいメディアによる映画や写真、コンピュータ・グラフィック、刺繍、料理(菓子づくり含む)など様々な分野で見られる。1980年代以降、アカデミックな手法に囚われないアウトサイダーアート⁴やストリートアート⁵などが登場し、媒体のみならず手法も含めると多種多様なものが「美術(芸術) Art」として社会に受け入れられ、親しまれている。

このように、作品制作には多種多様な表現媒体や手法があるが、共通して「表現」においては、物質として必ず目に見える形で残されている。作品は、作者が主体的に様々なことを想像し、考えを膨らませ、媒体に表すことで「表現」になる。素材や技法を吟味し、自身の表現に合わせて制作することで「作品」になるため、表現活動は「探究」的な学習に含まれると考える。しかし、表現するまでの過程、例えば構想やスケッチ、資料採集、調査活動、様々な技法や素材を組み合わせる挑戦や構成などは、作品を制作し、完成させようとする気持ち、そして知りたい、やりたいといった衝動が自発的な活動である「探求」の始まりを生み出している。そのため、「探求」の基盤がなければ「探究」的な活動である、「制作」、その先へと昇華することができないのではないだろうか。

(2) 美術科における「探求」活動

ヴィクター・ローウェンフェルドは『美術による人間形成』(1963)で、美術教育における一般的な指導方法として、3つの方法を挙げている。

まず1つ目は、児童美術に見られるような特質をさらに助長させる方法である。これは一般的に自由表現主義、子ども中心主義として言われるような、子どもの内的素材の表出を目指すものである。ローウェンフェルドは青年期におけるこの指導方法を否定しており、美術環境が整いつつある中で児童期へ逆行させるような方法と述べている。自己や社会に対して批判的な思春期・反抗期と言われる青年期において、内的素材の表出を助長させる指導は、「幼さ」からの脱却を否定し、教師の「押し付け」としての指導だけが残ってしまうという。

次に、完全さを求める方法である。生徒各々が持つ能力を、成人や専門の標準にできるだけ近づけようとするものである。これに対してもローウェンフェルドは否定的で、高い技術力や能力を持ち、従うことのできるマイノリティ生徒のための教育と述べている。そのためマジョ

³ 文科省 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説『美術編』2017年7月

⁴ アウトサイダーアート(Outsider Art): 独学で学んだ、型にはまらないアーティストによる作品を指す。様々な事情で美術業界から疎外された存在、有名アーティストには作れないような独特な魅力を持つ。生々しく、過激で、型破りとも言われる。

⁵ ストリートアート(Street Art): 都市空間や路上などのゲリラ的に行われる表現の総称。社会的、政治的メッセージ性を持つ。有名なアーティストにバンクシーなどがいる。

リティ生徒を無視する形で指導を行なってしまう方法である。

最後に、青年期をありのままの姿で受け入れる方法である。青年期は、体の変化とともに非常に強い自我意識⁶を伴い、他とは異なった独自の見方や、意識的・批判的な関係に立つて考えるようになる。栗田は、この指導方法について以下のように述べている（栗田，2015，p. 69）。

アイデンティティ形成は自己を振り返る主観と、他者を見る主観との同時的な反省と観察の過程で繰り広げられる。つまり他者の存在が必要となる。集団社会における外的アイデンティティを共有し、他者と自己を配置しなおすことから内的なアイデンティティが形成され、より支配的集団からの内的解放をもたらす。「アイデンティティ形成」は個人において自然発生的に行われるものではなく、社会性において構築されるのである。

続けて、栗田は青年期におけるアイデンティティ形成と美術科学習活動における「探求」の構造が非常に密接に関わっていることを示している（栗田，2015，p. 69）。

美術の表現活動において外的な素材と向き合うことで「内省」を行い、内的素材への気付きや創造性を得るように、青年期の生徒達も、他者や社会といった外的なものと向き合い、「内省」をすることで、内的素材に気付き、個性と呼ばれる新たなアイデンティティを形成するのである。他者や社会的な物事との出会いで起こる青年期の自分くずしと、「内省」によって再構成される自分づくりは、青年期の特性として存在し、社会という集団的文化に適合する過程で必要なものである。青年期における美術活動による「探求」は、その青年期の危機的状況に寄り添いながら、自分くずしと自分づくりとなる「アイデンティティ形成」を手助けし、または促すことができると考える。

栗田は青年期における「アイデンティティ形成」と「探求」との関わりを考察している。美術科における「探求」のあり方を提示し、「探求」および「探究」の意味を問い直すことで、美術教育における「探求」の可能性を述べている。

しかし、ここで述べられているのは美術科の学習活動における「探求」である。表現活動における作品制作では「探求」する学習過程が最も大切であり、その基盤によって制作が行われていることが明確であるが、「探究」的な学習活動にどう関わっていくのか、次項で考察を行っていく。

（３）美術科における「探究」活動の再考

令和２年度広島大学附属中・高等学校は教科主題で芸術（美術）分野における「探究」を以下のように述べている（広島大学附属中・高等学校，2020）。

芸術科的探究とは、芸術作品にふれたとき、なぜ美しいと感じるのかの根拠を自らの心に問いかける過程にある。（中略）美術の場合では色、構図、材質などの造形要素である。それらの手がかりと直感を融合させ、知識と連動させるという探究的活動を行うことによ

⁶ アイデンティティ形成

り、深みのある作品理解に到達することができる。

以上を踏まえると、前述で述べた探求活動と直感を融合させることで「探究」的な活動に到達することが考えられる。制作の基盤となる「探求」を、表現と鑑賞を交互に繰り返すことで、作品の造形要素を感じ取り、繰り返されることによって徐々に昇華され、「探究」的な学習活動に繋がるのではないだろうか。

2. 探究的な活動（創造デザイン科）と教科等との関わりについて

総合的な学習の時間において文科省は、新学習指導要領で、育成を目指す資質・能力の3つの柱を以下のようにまとめている（文科省，2022, p. 6）。

子供たちは学ぶことに興味を向けて取り組んでいく⁷中で、新しい知識や技能を得る。資質・能力の育成は、知識及び技能の質や量に支えられており、知識や技能なしに、思考や判断、表現等を深めることや、社会や世界と自己との多様な関わり方を見いだしていくことは難しい。一方で、社会や世界との関わりの中で学ぶことへの興味を高めたり、思考や判断、表現等を伴う学習活動を行ったりすることなしに、生徒が新たな知識や技能を得ようとしたり、知識や技能を確かなものとして習得したりしていくことも難しい。

ここで前述の1，(1)で述べた、知りたい、やりたいといった衝動が自発的な活動である「探求」の始まりなしに物事の意義や本質に迫ることは難しいと述べられている。さらに続けて、思考力、判断力、表現力等は以下のように述べられている（前掲, p. 6）。

子供たちはそれらの知識や技能を、社会や生活の中で直面するような未知の状況の中で活用して思考することを通して、知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、思考力、判断力、表現力等を発揮することを通して、深い理解を伴う知識が習得され、それにより更に思考力、判断力、表現力等も高まる。

要は、「探求」により習得された知識及び技能を何らかの方法で昇華させることで、更に深い理解を伴う知識が習得されると述べられている。知識及び技能と、思考力、判断力、表現力がサイクル構造を持つことが必要とされる。これら2つの柱⁸を、をどのような方向性で働かせるかを決定づける重要な要素が「学びに向かう力」であることが明記されており（前掲, p. 6），学びを人生や社会に生かそうとしたりする力として育んでいくことが教育に求められている。

（1）探究的な活動に生かされると考えられる資質・能力

本校が新設した教科「創造デザイン科」では、個々の生徒の持つ可能性を最大限に伸ばすことを目指した「個別最適な学び」と、既存の型にとらわれないアイデアを見出し、新たな仕事を生み出すなど、自らの道を切り拓くことができるような資質・能力（新たな価値を創造する

⁷ 「探求」活動

⁸ 「知識及び技能」と、「思考力、判断力、表現力等」

資質・能力⁹⁾の育成と両者の一体的な充実を目指している。

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説『総合的な学習の時間編』（p. 8）では、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としている。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

また、美術科では表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指している¹⁰⁾。

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。
- (2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し、構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- (3) 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

文科省が提示する目標(1)～(3)はそれぞれ、(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」を表しており、教科目標の実現に向けては、これらを相互に関連させながら育成できるような確かな実践を一層推進していくことが求められている（文科省 中学校学習指導要領美術編, 2017, p. 9）。

この美術科の教科目標、資質・能力と 1. (1)～(3)で述べた、美術科における「探求」と「探究」を照らし合わせ、考察を行う。

まず、(1)「知識及び技能」にあたる、「対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し…」の部分では、生徒自身が「探求」の心を持ち、知識や技能をインプットする活動の必要性が示されている。続けて「…創造的に表すことができるようにする。」では、探求によって得られた情報を、表現媒体によってアウトプットする探究的な活動として書かれていると読み取れる。

次に、(2)「思考力、判断力、表現力等」にあたる、「造形的なよさや美しさ、表現の意図と工

⁹⁾ (1)「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」、(2)「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」、(3)「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」。

¹⁰⁾ 文部科学省 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説『美術編』2017 年 7 月, p. 9

夫、美術の働きなどについて考え…」の部分でも、生徒が制作に関する構想の段階での「探求」が述べられ、続く「…主題を生み出し豊かに発想し、構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする」では、「探求」で得られた構想を表現媒体によって、より深めることのできる探究的な活動への昇華が記されている。

最後に(3)「学びに向かう力、人間性等」では、「美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、…」の部分で、(1)、(2)によって育まれた心（探求心）を表し、「…心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う」では、(1)、(2)によって育まれた「探求」と「探究」のサイクルによって、生活をよりよく創造する態度が養われ、豊かな情操が培われるのだろう。

つまり、美術科においての形や色彩、材料、光などの造形要素を「探求」し、表現と鑑賞を行う中で、(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」の「探求」と「探究」が交互に繰り返されることで、「探究的な学習活動」に繋がり、自らの道を切り拓くことができるような資質・能力、新たな価値の創造へと繋がるのではないだろうか。

(2) 探究的な活動に生かされると考えられる資質・能力を育成するための手立て

美術科においての「探究的な活動」として、本年度は生徒の中で「探求」と「探究」のサイクルで培われる資質・能力の育成が、授業の中でどのように行われているか分析していく。

対象学年：2 学年

授業名：《美術室棚を自分たちのファイルで彩ろう！》

期間：2023.5/8～6/5、計5回実施

使用用具：背表紙台紙（5.8cm～37.0cm）はさみ、色紙（教育おりがみ）、のり

内容：美術室後ろの棚に並ぶ美術科ファイルの背表紙を、色紙を使って表現する。

アンリ・マティスの切り絵作品を鑑賞し、色の組み合わせ、形の組み合わせ、はさみの動きを楽しんで制作する。

本題材はA表現の「感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動」として行うものである。ここでは描く活動として、筆や鉛筆などではなく、「はさみ」と「色紙」を使って「生徒が思い描く」表現活動と定義する。

題材内では20世紀を代表するアーティスト、アンリ・マティス - Henri Matisse - の作品《XI 空中ブランコ（コドマ兄弟）（『ジャズ』より）》（1947、ステンシル）と、POLA MUSEUM OF ARTがYouTubeで配信する、「Henri Matisse -JAZZ: Artists Books by 20th Century Masters¹¹」を主に鑑賞した。

マティスの切り絵作品を鑑賞することで生徒に意識してもらいたいのは、写実的な形に捉われる事なく、はさみの持つ緊張感や、限定された色の種類から構成を考え、制作する事である。制作を始める前に、いくつか考えられる注意点を生徒と共有した（一部抜粋）。

¹¹ <https://youtu.be/GhAjWCN-1jI>

・はさみを使う時

- ① 鉛筆などで下描きをしてから切りたい時，表になる色紙の方に下描きをすると，鉛筆が残りやすくなる（図1，図2）。後に消しゴムで消すと，色紙の色が薄くなり，色むらができる（図3）。
- ② 上記①で示したことに注意して，裏の白面に下描きをした際，はさみで切ると左右反転する（図4，図5）。

図1

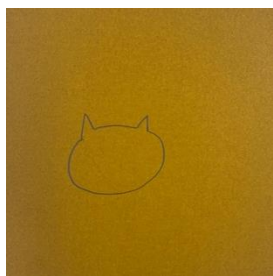


図2



図3



図4

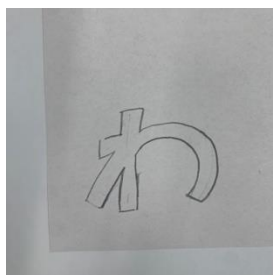


図5



以上のことを生徒に共有し意識させながら，各々が表現したいものと，題材の持つ造形要素（形，色，材料等）を探究しながら制作を始める。

探究しながら制作を進める中で，注意点①を表現として活用した生徒（生徒A）がいた。Aは黒い色紙の上で消しゴムを使い，作為的に色のムラを出す表現方法を用いることで，自分の表現方法として確立し，制作の「面白さ」を生み出すことに成功した（図6）。これはAの中で，探究的な学習のサイクルが行われた結果であると言えるだろう。

また，生徒Aの作品を他生徒に共有することで，生徒らの中で探究が深まり，さらにそれを効果的に用いる（図7，図8）生徒が現れたことで，クラスひいては学年の中で探究的な学習のサイクルが生まれたことも発見した。

他にも，薄い色紙の下に濃い色紙を重ねると，下の色が浮き出て見えることを発見した生徒（生徒B）もいた（図9）。Bは美術に苦手意識を持つ生徒で，作品制作がなかなか進まなかったが，色が浮き出る発見をしてからは制作速度が著しく速まった。彼なりの探究と発見が探究的な学習に繋がったとわかる。Bの作品も他生徒に共有したことで，それを効果的に用いようとする生徒（図10）が増え，探究的な学習に繋がったと考える。

図 6



図 7



図 8



図 9

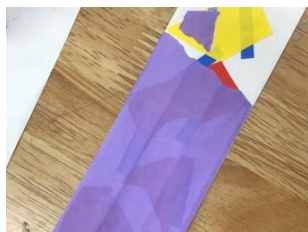


図 10



本題材の色紙とはさみを使って表現する，単純な「色」と「形」の造形要素の探求だけでなく，他材料による技術を見つけ出す「探究」，そして得られた情報を効果的に使う「探求」を行うことで更なる表現を生み出す「探究」，この相乗効果が探究的な学習と考えることができる。この「探求」と「探究」のサイクルは美術科の表現活動そのものであり，個々の生徒の持つ可能性を最大限に伸ばすことを目指した「個別最適な学び」と，既存の型にとらわれないアイデアを見出し，自らの道を切り拓くことができるような資質・能力の育成につながっていると考えられる。

3. 参考文献・URL

文部科学省 中央教育審議会「新しい時代の初等中等教育の在り方について(諮問)」2019年4月17日

文部科学省 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説『美術編』2017年7月

文部科学省 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校美術』2020年3月

文部科学省 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説『総合的な学習の時間編』2017年7月

文部科学省 『今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 - 未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究的な学習の充実とカリキュラム・マネジメントの実現』2022年3月

文部科学省 HP，新しい学習指導要領等が目指す姿，最終閲覧 2023年8月19日

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm

栗田絵莉子『中等教育における「探求」する美術教育—デューイの経験論と玉川学園での実践を手掛かりに—』2015年

布村育子『「生きる力」の変容と教員養成の課題』埼玉学園大学紀要 第8号 p.107-117, 2008年

西澤明・鷺山靖『美術科研究紀要』2022年度，金沢大学附属中学校, p.103-107

ローウェンフェルド・ヴィクター『美術による人間形成』1963年，竹内清・堀内敏・武井勝雄共訳，黎明書房

芸術科 教科主題『「芸術科」的 探究とは』2020年，広島大学附属中・高等学校

Oxford Language HP <https://languages.oup.com/google-dictionary-jp/> 最終閲覧日 2023.08.20

Weblio 国語辞典 HP <https://www.weblio.jp/> 最終閲覧日 2023.08.20

YouTube, POLA MUSEUM OF ART が配信する, 「Henri Matisse -JAZZ: Artists Books by 20th Century Masters」 <https://youtu.be/GhAjWCN-1jI> 最終閲覧日 2023.08.20

次	時	学習内容・ねらい（■）主な活動等（丸数字）	評価規準（○）3 観点【 】指導上の留意点（・）
1	1	■題材の目的を理解する。 ①マティスの切り絵作品を鑑賞する。 ②棚に収納したときの見え方を考える。 ■用具の配布と使い方を確認する。	○形や色彩，材料などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解している。【知・技】 ○作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えている。【思・鑑】 ・マティスの作品を鑑賞し，はさみの躍動感あふれる使い方や，繊細なはさみの使い方の違いを伝える。 ・また次の人も使うことを考え，はさみやのりの使い方を伝える。
2	3.5	■制作する。 ①はさみ，のりを使って制作する。 ②片付けをする。 ③他クラスの友達制作経過を鑑賞する。 （2 時限目以降）	○全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。【知・技】 ○材料や用具の特性を生かし，意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表している。【知・技】 ○収納棚に入れたときと使用する 2 場面を想定して作品を構成し，表現を練っている。【思・発】 ○創造活動の喜びを味わい，はさみで切る速さによって変わる躍動感を感じ，意図に応じて工夫したりする表現の学習活動に取り組んでいる。【態・表】 ・他クラスやほかの生徒作品を見せ，自身の作品にあった制作の技法を選び，効果的に使うよう伝える。
3	0.5	■完成 ①ファイルの背に作品を入れる ②片付け	○主体的に活動に取り組み，美術を愛好する心情を培っている。【態・鑑】 ・ファイルの背に仕上がった作品を入れることが難しいため，しわにならないよう授業当初に声掛けを行い，机間指導を行う。